

ともしび

永代経に寄せて

井上直之

(釋直道)



昨年は、長年宗願寺を支えてきた前住職の祖母妙澄が亡くなりました。ご門徒の皆さまのお力添えにより、無事に葬儀をお勤めできましたこと、心より御礼申し上げます。

振り返ってみると、私は祖母に子どもの頃から数え切れないほど叱られてきました。時には理不尽なことでも怒られて、正直たくさん喧嘩もしました。

でも、私が仕事や人間関係で悩んでいるとその理由も聞かずに、必ず私の味方になってくれた祖母でした。

祖母が亡くなった日、三歳の長女は「死」の意味を理解しているかどうかは別としても、祖母の遺体に向かって両手を掌わせ「おおパーバ(曾祖母)さようなら」と言いました。

その時は長女にこう言いました。「さようならだね。だけれども、浄土真宗のみ教えでは、人はこの世の縁が尽きてお浄土に生まれ

たら、すぐにこの娑婆世界に戻ってきて、様々な私たち、仏縁となつて私たちを見守ってくださいからです。

でも、同時にこうも思いました。それでも、やっぱり家族がいなくなるのは悲しい……と。

ひとつだけ言えるのは、私たちのこのいのちは、数えきれないのちのバトンタッチを繰り返していただいた尊いいのち、だということとです。

それなのに、私たちは日々の生活に追われ、いただいているこの「いのち」のありがたさを見つめ直す時間の余裕もなく、毎日をごしていませんか。

永代経は、そんな私たちがひとつになつて、たくさんのお縁に感謝し、手を掌わせることができる大切な法要です。

当日は、皆さまとともに「仏説阿彌陀経」をお勤めさせていただきますので、よろしく願います。

南無阿彌陀仏

お知らせ

- 宗祖降誕会 4月29日(月) 午前11時
- 花まつり 5月5日(日) 正午
- 大乘院釋弘三祥月法要 6月9日(日) 午前11時
- あじさい忌 6月23日(日) 午前11時
- 全戦没者追悼法要 8月15日(木) 午後6時
- 恵信尼公法要と敬老会 9月13日(金) 午前11時

住職「音御堂」で歌う

四月十三日(土)、京都・西本願寺の「音御堂」という合唱大会で、住職が音楽法要の導師として歌い、数百名の大合唱の指揮をします。仏教音楽の普及に尽力した前住職がさぞかし喜んでくれていたと、だろろうと嬉しく思います。(由真記)



石和温泉での仏社研修会にて左から刈部さん、手島さん、住職、福島さん

壮年会活動に

思うこと

福島 慶久

二月十七日、十八日、宗願寺仏教壮年会のメンバーである手島門信徒会長、刈部さん、直道住職とともに石和温泉にて開催された「東京教区仏教壮年会連盟第三十九回結成記念日研修会」へ参加してきました。

研修内容は、大阪教区南組正満寺住職である布教使の安方哲爾先生による「苦しみとしあわせ」苦悩の有情をすてずして」を講題とする二日間にわたつての講演を拝聴の他、勤行や懇親会等を行う研修会でした。

私個人としては、宗願寺で行われている壮年会活動以外に初めて参加する経験となり、非常に有意義な機会を得ました。

東京教区仏教壮年会連盟における結成記念日研修会については、来年二月に築地本願寺において日帰り研修会を開催の後、二年後の二〇二二年二月には、茨城東西組が担当となり、四十一回目の研修会が決定しています。

すでに、住職の方々等によつて会場選定の準備がはじまつておりますが、その開催にあたっては、宗願寺も担当組の一員として、準備から開催の実務までを務めなければなりません。

研修会の成功のため、この場をお借りして、門信徒の皆さまのご協力、結集をお願いいたします。

宗願寺も、前住職妙澄さまの亡き後、今年からは直道住職の先導のもと、門信徒が一丸となつて新たな歩みを始めなければなりません。

私自身も、その一人として少しでもみ教えの輪を広げられますよう、今後とも壮年会活動を初めとした行事活動へ積極的に関わって行きたいと思っております。

感謝



二十年以上の間、お寺の境内の清掃を担当してくださった渡辺芳子さん(左)と戸蒔チヨ子さん(右)が、この度引退されました。誠心誠意、身を粉にして働いてくださいました。ご恩は決して忘れません。

あれはお盆前だったので、午後七時近くなつても働き続けているお二人に気づいた母が、「もう帰らなくちゃダメよ、旦那さんが待っているのに……」と、気が揉んでいたことを思い出します。母の気持ちも、お二人の気持ちも理解できる私でした。

長い間、本当にありがとうございました。(由真記)

母を看取った今思うこと



井上 由真

一月二十二日に、調布市の光源寺ビハラー「蓮のうてな」で話をさせていただいたときの講題です。「母を看取った今思うこと」、その答えは、私も確実に死にゆく身であると強く知らされた、ということでした。母とは一度も離れて暮らしたことがなく、常に一緒に生活の中で、叱られ、導かれ、(心の中で)反抗し、笑い、泣き、同じご飯をいただいたのでした。



晩年の母
大好きな吉祥寺にて

母亡き後のお寺の生活も、相変わらず慌ただしく、夢中で働いていて「あっ、お母さんにご飯あげるの忘れた! どうしよう……!」と、ドキッとすることがあります。そして、ああ母は亡くなってもういないのだと、胸を撫でおろすのです。

今年に入ってその回数はいぶ減って、母がいないことに慣れてきたようで、それはそれで淋しいことです。

父が亡くなり、私が東京仏教学院に通うことになったとき、母が「これを読んでおきなさい」と手

渡してくれたのは大峯顕先生の「親鸞のコスモロジー」でした。母はこういう本が好きなのだ、興奮して読んだことを今思い出しています。

母は膝が元気なので、私が正座できないことを「情けないわねえ」と残念がり、本堂もなかなか椅子にしませんでした。ご門徒さんのリクエストで渋々椅子を入れるまで、母娘のバトルが繰り返されたことを懐かしく思い出します。

このお寺は、母の発想から始まった行事も多いです。亡くなった後もすべて今まで通り勤めています。

二月四日の立春拝賀式には、母に習った「クルミ寿司」を、いつもと同じように仏婦のメンバーが作りました。新潟がルーツである母が、その母の得意だったクルミの餡煮入りの海苔巻を私たちに教えてくれたものです。

お寺のクルミの木が枯れ、もうあのお寿司は作れないかと思っていたら、仏婦の方が渡良瀬遊水池の方で収穫してきてくださいました。日本のクルミで美味しいものです。

報恩講お建夜のギンナンの袋も母が昔から作っていたものです。

手作りのキャラメルなど、味の記憶は鮮明なものだと気づきました。もう二度と口にできない悲しみとともに。

本堂で、台所で、母の気配を感じながら、毎日働いている私です。「お寺は世の中のオアシスでな

ければいけない」というのが口癖でした。「お寺はあなたの実家なんだからね」と、ご門徒さんに語りかけているのもよく耳にしました。

そんな母の願いを忘れず、時代の要請にも応えつつ、お念仏を伝えながらお寺を守るとなると、どうしても自分の力不足を感じてしまいます。

でも、ご門徒の皆さまと一緒に大丈夫。今後とも私たちをお見守りくださいますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

彩弥と弥那との日々

井上明寿子



彩弥の七五三

今回は、ふたつの歌を紹介させていただきます。

桜花 君が命を咲き初めぬ
散りても夜空の星となりませ

これは妙澄さまが母の葬儀で詠んでくださった歌です。

もう二十年以上前ですが、当時「訃報の知らせを受けた時にちょうど境内の桜を眺めていたの。満開だね。笑顔が素敵で花のような人だったわね」と話すおばあちゃん

ん住職に随分救われました。

もうひとつは……

明日ありと 思う心の仇桜
夜半に嵐の吹かぬものは
(明日も咲いていると思ってい
る桜は、夜中に嵐が来てはかな
く散ってしまうかもしれない)

こちらは親鸞聖人の決意の歌です。仏門に入られるとき、命や心の無常を桜に例えて詠まれました。一見正反對のようなふたつの歌は、厳しくも温かい真実に溢れているように思います。

明日何があるか分からない、今日散っても願わずにはいられない、それでも星のように見守られているのだと、諭されているように感じました。大ばあばが仏さまになられて身近にすることを、子どもたちにも少しずつ伝えていけたらと思っています。



編集後記



二年前、左胸に影が見つかり、乳ガンの疑いで針生検を受けました。その結果悪性の細胞は見つからず、それでも半年に一度検査を受け続けました。

二月末、二年間腫瘍(のようなもの)のサイズに変化が見られなから、次の検査は一年後に、と告げられホッとしました。

最初の検査当時は母の世話が大変だったときで、真っ先に「お母さんどうしよう」と思いました。住職は「一年後にねねが死ぬことまで考えたよ」と言いました。ご心配いただいた皆さま、有難うございました。

最近、柑橘類の皮を使ってピールを作るようになりました。なかなか難しく、苦労しています。それが楽しいです。

母の愛猫「要」とは、每晚抱き合って眠ります。母に食べさせるため育てた菜の花の収穫時期になりました。少しづつ母の死を受け容れ、元氣を取り戻しつつあります。永代経のお齋作り頑張ろうと、それが今の思いです。



発行・宗願寺門信徒会
編集責任者・井上由真 (由美子)
カット・大建弘子
(印刷所・阿部印刷)